

鈴木量博駐豪日本大使によるスピーチ（仮訳）

（於：メイ・ウィーアメモリアルモーニングティー）

- ご来賓の皆様、本日、私たちは、日豪二国間関係における重大な出来事を追悼すべく、ここカウラに再び、集うこととなりました。
- 80年前の今日、8月5日の朝、カウラ市民の方々は、いつもと同じ日常を迎えることを想定されていたことでしょう。
- この日は正に土曜日でしたので、午前中の買い物や、もしくは午後には蹴球に興じようなどと。
- ところが、丘の向こうの捕虜収容所からラッパが鳴り響き、やがて銃声、叫び声、日の出前の夜空を照らす炎が土曜の朝の平穏を打ち砕き、以って日豪関係を大きく変える転機の日となりました。
- 宿命の朝、多くの命が失われ悲劇が起きました。しかし同時に、全く思いもよらぬ出来事もその朝に起きたのです。
- 地元、ローズ・デールのウィーア農場のメイ・ウィーア夫人は、見つかった日本人達が捕虜収容所からの脱走者だったことを承知の上で、彼らが官憲に引き渡される迄の間、スコーンと紅茶をご馳走したのです。
- 混沌の中での信じ難い思いやり、慈悲の行為は未来永劫、決して忘れられることがないと確信します。
- そして今朝、我々は、メイ・ウィーア夫人に想いを致し、彼女が脱走兵

の人々に与えたのと同じおもてなしをこの場で受けております。これは正に、ここカウラ、そしてメイ・ウィーア夫人に象徴されるように、私たち、人間が心に「良心」を有していることの証左であります。

- 本日、私はこの場に日本大使として参加させていただいておりますが、実は、私は、一部の方々が既にご存知のとおり、先の大戦中、沖縄海戦で死ぬことの出来なかった特攻隊員の息子でもあります。
- 生き残ってしまったことの恥辱によって85歳で臨終するまで苦悩を引き摺った父でしたが、だからこそ小学生の頃、私は父から、平和を守ることの尊さ、国に奉仕することの尊さ、とりわけ、敵であれ味方であれ、国の為に殉死した人々を敬うことの尊さを繰り返し教えられました。私の父が長年に渡って引き摺った恥辱の苦悩が正に、多くの日本人捕虜の方々を悲劇へと駆り立てた動機だと確信しています。
- だからこそ、カウラの人々が、時を超えて、日本から8000キロ離れた異国の地において、命を落とした日本人の同胞の墓碑をあのよう威厳ある形で守って下さっていること、皆様の慈悲深さ、寛容さ、理解と敬意に対し、私は、個人として、深く感動しています。
- この地は「和解の力」の生き証人であります。
- 1944年8月5日から80年を経て、今日、日豪関係は全く様相を新

たにしました。広範な貿易関係に始まり、関係は一層拡大、深化し、我々は「特別な戦略的パートナー」「事実上の同盟国」となりました。

- 我々は、地域における法による秩序と平和、そして発展を守るため、互いに交渉し、協働し、協力しています。
- ただ、それ以上に大事なこと、それは日豪が今や最も親しい「メイトー仲間」になったということです。
- この友情は、日本人とオーストラリア人が、何世代にもわたって、互いの国を訪問しあい、お互いの文化を学び、真摯に理解し合おうとしてきたことの結果であります。
- それは好奇心から寛容さ、そして親近感へと繋がっていく連鎖でした。
- 課題山積の現代世界の中であって、ニュー・サウス・ウェールズの真ん中に位置するカウラのこの街を見つめることにより、差異を克服してより良い未来を築くためのインスピレーションを得られるであろうという、この事実は、正に我々にとっての救いであり、希望であります。
- 過去から現在に至るまでのカウラの市民の方々、とりわけカウラ・ブレイクアウト委員会、永倉三郎基金、ブルース・アンド・マーガレット・ウィーア基金の会員の方々による、親善への取り組み、教訓を忘れないための過去の理解と解釈の試みは、不朽の功績であります。
- 私たちは、カウラの皆様の誠意に対し、永遠に忘れることのない深い恩

義の念を抱いておりますが、それは正に、ここに広がるカウラの丘陵の中にあって、皆様が人間の「良心」とは何かを示されているからに他なりません。

- この素晴らしい関係がこれからも久しく続くことを願いつつ。
- ご清聴、ありがとうございました。